

## ■中傷に対する訓練(3/3)

主イエス・キリストご自身も、この中傷に対する訓練を、だれも決してこのようには受けなかったという規模でお受けになった。この人の子ほど偽証を立てられ、口ぎたなくののしられた人が、ほかにいるであろうか。主が片手のなえた人の手をいやされれば、為政者たちはただ怒るばかりであり、彼らは直ちに、主イエスをなき者にしようと計るのであった(マルコ 3:1-6)。また、哀れな人々から悪霊を追い出して助けてやると、今度は、悪霊につかれているからあのようなことをすることができるのだ、とののしられた(22-30節)。あわれみに満ちたことばを語り、力あるみわざをお示しになれば、同郷のナザレ人からは、軽蔑を込めて、「この人は大工ではありませんか」とあざけられた(6:3)。親しさの表現であるくちづけで弟子のひとりに裏切られ(14:45)、多くの偽証人の立つさばきの庭では、彼らの曲解に対して「何もお答えにならなかった」(14:61)。生かすことも殺すこともできるピラトの前では、民の宗教的指導者である祭司長たちによって告訴されながら、「何もお答えにならなかった」(15:5)。

主はその肉の生活のときに、この預言を成就されたのである。「彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらず」(イザヤ 42:2, 3)。また死の陰にあっては、次の預言を成就された。「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない」(53:7)。

主は人々に次のように教えられたことを、身をもって知っておられた。「わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのだから。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました」(マタイ 5:11, 12)。

謙遜な救い主に仕えるすぐれたしもべパウロは、この訓練の成果を示してくれた。彼が次のように言ったことばには実感がこもっている。「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません」(Ⅱコリント 4:8, 9)。マケドニヤでは(そこでは現今と同じような騒乱の中にあった)、「私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました」(7:5)という状態であったが、やはり勝利を得ることができた。彼はまた、福音の実際的面について、次のように公言することができた。「だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。』もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい」(ローマ 12:17-21)。

中傷に対する訓練は、いかに私たちのたましいの奥深くまで掘り下げることだろうか。しかし、そのように深く掘り起こされてこそ、主イエスご自身のかおりを放つ美しい花を咲かせることができるのである。

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第七章「中傷に対する訓練」より】  
※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。